

健康文化

## 出産の情景 一産小屋を訪ねて一

森田 せつ子

最近の若者といっても専攻科の学生を通してのことであるが、生活体験の乏しさにいくつか気づくことがある。助産を例に挙げてみると、「育児文化」に関することである。赤ちゃんの「おんぶと抱っこ」の話合いの中で愕然としたことは、学生誰一人子守りの体験がないことである。「おんぶ」は何かイメージはできるのだが、「紐、帯」を使い子どもを背負う、ということを知らないのである。特に「紐」を使用しておんぶの方について、どのように紐を使っていいのかわからない。一応「紐」を使用しておんぶ方をしてみたところ、奇妙なものをみるような顔付きであった。現在は紐よりバンド形式で背におんぶするものや前抱きができるものや、児の成長に対応できるよう多種多様なものがあるが「紐や帯」はみあたらない。それを使用していたのはつい30年～40年ほどの前のことである。その当時まだ学生は生れていないのだから知らないということはやむを得ないが、移り変わりの早さには驚くばかりである。以前より母親達がいろいろ工夫をこらして使用してきた育児用品などの生活の知恵が消えていくのが残念である。「子守り帯」については、その変遷過程、現代的な使用意義など検討中である。

また、同時に問題と思うことは、学生をはじめ若い女性達の子守りをするということに代表される育児体験が稀薄なことである。このことは出産を間近に控えた妊婦さん達に尋ねても同様な答が返ってくる。赤ちゃんをみたことも、触れたこともなく、ましてお産をするということは、彼女達にしてみれば初めて体験することばかりなのである。

毎月書店にはマタニティ、育児の月刊誌が一斉に並ぶ、主な人誌だけでも総発行部数は二百万部を超え、子どもの数の減少に反して部数を伸ばしているという。昔からの言い伝えにある「子どもは100人の声を聞いて生まれる」と言われていたように、出産や育児は祖母、母親や地域の女性達からの口頭での伝承がみられたが、今は雑誌が新米ママの情報源にということであろうか。文字からの伝承は文字の背景にある気持などは伝承されにくい。

このように子どもを産むことにおいて、様々なことが変化してきたが、最も大きな変化は、出産の場が自宅分娩から施設内分娩へ移行したことであろう。

1947年には全出生のわずか2.4%を占めるに過ぎなかった施設内出生が、1955年からわずか8年間に30%から80%とほとんど直線的に増加し、1959年と60年の間に施設外分娩の割合が逆転した。自宅出産から病院出産へ移行したことである。

一方、1974年からそれまで増加傾向にあった出生数、出生率が減少に転じて、その後予想をはるかに上回る減少を年々続けて1989年には、出世率人口千対10.2となり少産少死型の人口動態が定着した。また、1947年では合計特殊出生率は約4.54人だったが1993年には1.46人と約三分の一に減少、1994年1.50人と21年ぶりに増加した。しかし一人の女性が産む数が1.50人と少ない。

## 1) 出産場所の変遷

### 1. 産小屋での出産

出産の場は自宅内と自宅外の二つに大別できる。自宅内は母屋、自宅外は屋敷内の小屋、また公共の産小屋などの自宅外の出産の場である。さらに自宅内は床上と土間の二つに分けることができる。自宅外での出産の場所に産小屋、産屋がある。

今日では産小屋の名残りは福井県敦賀半島に1カ所、伊豆七島の青ヶ島などは1955年(昭和30年)、愛媛県でも今は消滅しており、実際に使用している所はない。しかし明治年間までは、産小屋は日本の広い範囲で使用されていたという。

産小屋も個人所有と地方公共団体の公共の建物であった所の二種類に分けられる。出産だけではなく、月事(月経)の期間も使用していることが多い。月経期間の使用は、瀬戸内の島々や沿岸部では「ヒマヤ」という風習があり、暇屋(西条市、T家)、秘魔小屋(大三島、F家)などの字があてられていた。秘魔小屋(大三島、F家)には1992年に文化人類学専攻の知人と訪ねたが、大きな旧家の家の庭の一隅に建てられていて12.3平方mくらいの広さで内部は2室にわかれ、土間と畳の間にわかれていた、改造されていたので詳しくはわからなかったが、F家では20世紀初頭まで、一家の女性たちは月経時や産褥期を過ごしていた。

福井県敦賀半島に1カ所名残りをとどめている産小屋については1987年に訪れた。1933年(昭和8年)に旧部落の南部で海岸の平地にあったが、1949年(昭和49年)に約100m離れた現地点に移築された。県の有形民俗文化財指定を受け管理されている。小高い山裾にあって横を溪流が流れる県道と墓地と水田と川に囲まれた所である。敦賀市内の病院や診療所での出産が多くなり、1965年

(昭和40年)に閉鎖した。

小屋の内部は2室、土間と畳の間に区切られており、以前は、日常生活に事欠かないほどの備品が揃っていたが、現在はほとんど散失している。出産を物語る力綱1本が天井から下がっており煮炊きに利用していたと思わるカマドが残っているのみである。小屋入りは産気がついてから入り、退室は産後20日目であったという。

1991年香川県の伊吹島の「デーベヤ」を訪れた。瀬戸内の島々には「サンヤ」「デーベヤ」「ヒマヤ」などがある。伊吹島は香川県の西のはずれの観音寺港より市営の連絡船にのること約30分、沖あい10キロにある漁業の島である。面積は1.09平方km、人口は昭和32年の4,396人を最高に、今も減少の一途をたどり、高齢化も進んでいる。伊吹島は瀬戸内海のどこにもある島の一つであるが、この島にはつい近年まで共同の産屋が残っていたことである。今は「伊吹産院」の石柱と礎石を残すのみである。港におりると、島独特の急勾配の坂道に沿うように家が密集し、所々の家の塀には船板が使われているのが印象的である。そこで出産をした女性の話を聞くことができ、案内されて「デーベヤ」跡を訪ねた。島の頂上部近く、北側の入り江を見下ろす風光のすぐれた場所に立っており、廊下に面して6畳ほどの部屋が5つと食堂、洗濯場、炊事場もあった。産小屋は通常出産をする場所であるが、伊吹島の場合は自宅で出産した後、翌日褥婦は新生児を抱いて「デーベヤ」に入る例が大部分であったらしい。その後には、近親、友人の女性達が食料、燃料など当座の生活資材を持ち、褥婦に続いた。男子は禁制であった。分娩室や診察室が完備されてからは、出産前からこもる人が多くなったという。誕生3日目、お七夜、15日、デーベヤじまいなどの行事は古式に従って行っていたようだ。こもるのは原則として33日で、複数の人と暮らすこともあり。ともに生活をした母と子は生涯の友達として交際をした。ここでの暮らしは産着を縫ったり、忙しい漁村では考えられないのどかな生活で、暗さはなかった。

分娩の介助は昭和22年以後は助産婦がとりあげていたが、それまでは老婆がとりあげていた。産婦人科医院で出産する人が徐々に増え、昭和45年4月を最後に、400年続いた「デーベヤ」の歴史に幕を閉じた。今は青い海のみえる高台に、当時を偲ばせる「伊吹産院」とかかれた石柱と礎石が点々と残っているのみで、島の女性の出産を物語るものは残っていない。理由は生活道路の拡張のためということであったらしい。

産小屋での生活は、粗末な侘しいものであったと思われるが、そこは彼女たちにとっては精神的な解放されたひとときであった。

## 2. 産小屋の意味するもの

以上のような「ヒマヤ」「サンヤ」「デーベヤ」といわれる産小屋での風習は、血にまつわる穢れをもととした風習で、特に山や海の危険な仕事に従事する人々が月経やお産などの血をみることを嫌い、そのような時、家の火が穢れることを恐れて、それらの女性とは「別火」の生活をさせたためと言われている。しかし、これに対して産神の存在をどのように考えるのか、子安神、山の神、箒神などところによってさまざまな呼び名があるが、出産が穢れというより、神の加護により安産を祈り、精進をする神聖な場が産小屋であったとも考えられる。

産小屋は海辺に建てられており、それは後に焼かれて始末されている。その意味するところは誕生をあの世からこの世に生まれ移ることとして捉え、海岸は、海の彼方の常世に最も近い場所であり、この世との境界を意味している。そこに一時的な仮住まいを設け、誕生が終了した段階で、誕生に要した物品を破壊することにより、巢立ったこととみなしている。さらに後世、海のみえない山中を選んで産屋が建てられるようになったのは、かつて神聖なこととみられていた出産が穢れの対象としてみなされた結果と考えられる<sup>1)</sup>。中世、民衆の間では道の辻において、うめき声が外の人に聞こえるような道に面した部屋において出産がなされていたが、それは道が穢れの及ばない所であったこと、海の彼方から来るとされる生命は、現実にある村と村とを結ぶ道を通ってやって来ると意識されていたためである。

出産を神聖なこととして扱ったのか、穢れと見、隔離しようとしたのか、さらに今後の研究を必要とするところである。

## 2) 出産の場に求められるもの

出産の場所の変遷は「古事記」に出てくる豊玉姫の出産にあるような、海辺に産小屋を設けて出産をしたり、あるいは隣村との境界とか分岐点に産小屋を作ったり、さらに屋内に移って土間から納戸へと変わってきた。出産場所の変遷はこのような順序よく移行してきたわけではない。その後、昭和30年代からの急激な施設内分娩への移行は、屋外から屋内へと移行した出産の場を再び屋外へと移した。

屋内の出産場所であった納戸での出産は騒音をさけ、薄暗く、産婦に沈静を与えた。また、生まれてくる子どもに対して目の刺激を少なくするという意味もあった。納戸は穀物を貯える場所であり、衣類をしまうところでもあり、夫婦の寝室でもあった。ここでの出産の意味は穀物が発芽、成長するように、“生

命”が発芽し成長する力、つまり生まれ出る力、成長する力を貯えることを意味するものと考えられる。

フレデリック・ルボワイエ著の「暴力なき出産」では、生まれてくる子どもの立場から、現代の病院での出産は赤ちゃんに苦痛を与えている。つまり、母親の胎内では暗く、暖かく、柔らかいものに包まれていたのに、煌々と照らす照明、金属音、産婦の声、介助者の声、足音等々新生児にとっては暴力であるということなのである。さらに、赤ちゃんの誕生を「家族の出来事」として捉えている。ルボワイエに対しては批判があるが、「出産とは何か」を私たちに問いかけている。

産小屋や納戸での出産をみると生活の場であったこと、静かさ、ほの暗い明かり、家族にかこまれての出産は産婦に安寧をもたらしたであろう。

今、自然出産を希望する妊婦が多い。自然の営みとしての出産を、自然のままに、出産を迎えた先人の女性達の気持ちを大切にしたいと思っている。

#### 引用・参考文献

- 1) 新村拓：出産と生殖の歴史、164～165、法政大学出版、1996
- 2) 牧田茂：神と女の民族学、講談社新書、1981
- 3) F、ルボワイエ：暴力なき出産、星雲社、1991
- 4) 吉村典子：子どもを産む、岩波書店、1992
- 5) 鎌田久子他：日本人の子産み・子育て、頸草書房、1990
- 6) 母子衛生の主なる統計：厚生省児童家庭局、平成7年度刊行、1995

(名古屋大学医療技術短期大学部助教授・専攻科助産学特別専攻)



敦賀半島の産小屋